

上記研究の一環として、Bender Gestalt Test を内因と外因両精薄群に実施した。この研究では、(1)内因、外因精薄群の visual motor gestalt 機能には統計的有意差がある。(2)この有意性は test の各図形についても認められる。(3)しかし、基本的な visual motor gestalt 機能である固執（保続）性とループ化傾向については、両群に差を認めない。(4)外因群では内因群に比して、精神機能の非連続性が描画順序の不統一性として認められる。(5)この test は両群の分類に有効である、のように5仮説を設定した。模写結果を Pascal の方法により採点し、合計得点と3図形の得点が有意に外因群に高いことを確認した。また、固執性、ループ化傾向には、両群に有意差なく、描画順の不統一性は外因群に有意により顕著であつた。最後に、Pascal とは別の基準によつて評定し、両精薄群を分類するためのこの test の有効性を検討した。

II

本研究は、内因、外因型に類型化された精薄児の、心理学的特性の差異を明らかにするために、テストバッテリーの1つとしてとりあげた Weigl-Goldstein-Scheerer Color Form Sorting Test の施行結果の分析、検討を試みたものである。被験者は、内因群31名、外因群31名、幼稚園児26名よりなる。今回明らかになったことを列挙すれば、①内因群は外因群よりも、第1試行において形体分類を行なう者が多く、shift 可能の数も多く、pattern formation を伴う数は少ない。しかしいずれも、有意ではない。ただ normal approach の頻度は、内因群が有意に高く、外因群ではわずか2名のみである。②pattern formation に関しては、Halpin の報告と一致しないが、これはむしろ判定基準に原因があるように見える。③幼稚園児は、内因群とほぼ同様の成績を示した。④sex, CA, MA, IQ 等、他因子との相互作用を調べた結果は、CA と shift, CA と pattern, sex と形体または色彩による分類の好み、等に関しては、有意の関係が認められたが、他は示すことができなかった。

III

われわれは今まで、精神薄弱児の中で、比較的に明瞭な内因型と外因型を選んで、種々のテストや実験を施行し、その類型差を明らかにすると同時に、どういうテストや実験が類型を判定なしえるかを検討してきたがいまだに決定的な決め手となるようなテストや実験を見出すに到っていない。

次に、類型差についていえば、Werner, H. 等もいのように、外因型精神薄弱では、基本的にはパーソナリティを構成する心的領域間の非連続性、分離性が存在す

るように思われる。けれどもわれわれは、このような非連続性と分離性をもつ心的領域間にもいくつかの連続可能の群があるような見透しを得つつある。

第2に、この理論からして、類型差の絶対的な決め手となるようなテストや実験はないのではあるまいかと考え、相対的に、判定可能なテストや実験を探索したい。

第3には、内因、外因の分類の他にわれわれは混合型、不詳型もあるものと考え、さらに、臨床的に内因群、外因群を細かく分類しうるものと思つており、今後は以上の3点に研究をしばつてみたいと考えている。

精神薄弱児の類型学的研究(1)

——類型の設定について——

三 木 安 正 (旭出学園教育研)

精神薄弱児を教育の対象としてみる場合、知的欠陥の面だけを問題とすれば、知能指数などによる分類ですむかもしれないが、精神薄弱児なりに望ましいパーソナリティの形成ということを問題とすれば、まず行動的類型を設定し、これが教育・訓練によつてどのように変容するかを吟味していく必要がある。

精神薄弱児の類型的研究といえば、近來、その原因によつて内因性、外因性に分けた研究が多くみられるが、内因、外因の診断が不明確であるうえに、行動類型というものは必ずしも病理学的原因にのみ依存するものではない。

われわれはまず、経験的に、精神薄弱児の行動類型を幼弱、興奮、固執、支離滅裂、夢遊の5型に分け、それぞれについて10の行動特徴をしめす項目をつくり、これをアランダムに配列して行動の評定をする試みを行なつた。これを修正していつて、さらに適切な行動類型を設定し、心理学および教育実践的にこれを検討し、さらに病理的類型との関係をも求めていこうと考えている。

精神薄弱児の類型学的研究(2)

—Performance test の反応型—

○伊藤隆二・三木安正(旭出学園教育研)

問題：発表(1)で設定した行動類型により performance test の反応型にどのような特徴がみられるかを問題とし、今回は Kohs Block Design テストの perform process および response pattern と行動類型との関連をみようとした。方法：24個の模様図を呈示し、Vp に block で、再構成させる。その再構成過程、型を記録する。結果：支離滅裂型と興奮型の performance process と pattern は類似しており、いずれも色彩の識別、構成化不能が特徴づけられ、固執型は process に失敗の

くり返し、所要時間の長びくことなど特徴で、幼弱型の反応は幼稚で、構成も自己本意の基準による傾向が強く、夢遊型は成功率が高く、かつその失敗は多く「よい間違い」または模様図の回転構成が著しい。知能段階では低いほど色彩の識別、構成化が困難で、高いほど志向性があらわれる。

精神薄弱児の類型学的研究(3)

—Rorschach test の反応型—

三木安正・○原 祥子・増淵洋子(旭出学園教育研)

先に設定した類型の各型により、ロールシャッハ・テストの反応型にどのような特徴があるかみるのがこの研究の目的である。結果：興奮型ではCが多く反応時間が早く、刺激に対してはすぐに反応し、衝動的な点がみられる。支離滅裂型では、Mがなく、H、F+が少なく、Aが高い。内容分析によるとさらにはつきりするが、一貫性のないまとまりのなさを示す。固執型では、形式分析で特徴はないが、くり返しの反応や、カードの部位に反応し、いつまでも同じことをくり返す傾向がみられる。幼弱型では、Pが少なく、F+、Fが多く、単純な幼稚な型で内容的にみるとさらにこの点が明らかになる。夢遊型では、W、F+、FMが多く、反応時間がおそい。能力はやや高いが、刺激が出されても考えのまとまりのなさをおぼわしている。今回は一般的記号の分類により、内容分析は主なケースをみるにすぎなかつたが、今後この面から類型的な特徴をとらえたいと思つている。

討 論 の 概 要

司会者はまず、本部門の発表内容が、精神薄弱児の分類と類型学的研究が主なものであつたことを指摘したうえで、この討議の焦点を、教育の問題にしばりたいと要望し、質疑に入つた。

伊藤隆二がまず類型学的研究における内因型、外因型の基準が、おのおの研究によりまちまちであるが、これをどのように設定すべきかとの問題を奥田三郎に質問した。これに対して奥田からは、外因型は脳の異質的变化のあるもののみに限定すべきであるとの返答があつた。大西憲明は賛成ではあるが、実際には分類の困難な事例が多いこと、また山下功はたとえば小頭症の精神薄弱児を、ある人は外因型に、またある人は内因型に入れる人があるという例をあげた。しかし、奥田がいうように、今日の類型学的研究の段階では、異質的变化の有無がはつきり見られるものについてのみ追及してみることが必要であろう。

ついで、司会者により、類型学的な分類によつて精神薄弱児の教育を行なつている例があるかどうかを、各地

について質したが、まだ実施しているところはない。しかし、堺市の養護学校では学習の可能性についていくつかのタイプに分けて教育している旨の報告があつた。

ほかに木村に対して実験群、統制群の等質化について、1、2の質疑およびこれに対する応答があつた。

(木村謙二)

青少年非行

成就欲求・要求水準・作業量の相互関係の研究

○富田達彦・三島二郎・浅井邦二(早稲田大)

人間動機づけの主要指標の①空想成就欲求②要求水準③行動強度の関係を実証的に追求し、その説明をS—R説の枠組内で「微小予期目標反応("G,"F)」概念を用い試みる。賞罰のもたらすsHRとKの2影響のうち、sHRを排除するため、同一Ss(中学1年)にクレベリンと記号置換を交互に各8試行課し、賞罰操作を前者のみにし、そのK効果を後者の作業量と要求水準に測定した。1群7名、8条件群。④賞は与え方によりK効果が異なる。○印は要求水準の上昇と行動強度の低下、賞の言葉は行動強度と要求水準両者の上昇。⑤罰(×印)は要求水準をあげないが行動強度を著しく上昇させる。⑥連続報酬(○印または賞の言葉)後の無報酬(または罰)がもたらす"F効果は、行動強度上顕著だが要求水準では著しくない。空想成就欲求は、どの群も、作業の前と後で有意差を示さない。

非行青少年とマス・メディア

○吉田 寛・○大川 力(中野刑務所)

その1 新聞と非行青少年

マス・メディアが現実の非行にいかに関与しているかを明確にすることを目的として、まず新聞をとりあげ、少年院在院者と刑務所入所中の20才から25才までの者各90名を対象として、個別面接および集団調査による方法、および実際に新聞を読ませて、新聞の非行青少年に及ぼす影響を明らかにしようと試みた。

結果は少年院在院者・青年受刑者ともに新聞に対する接触率はきわめて高く、スポーツ・映画演劇欄に興味が集集中であり、犯罪記事に対する関心が高く、より広い社会全体の動きについての関心が比較的低いことがうかがわれる。青年受刑者と少年院在院者の間では、前者の方により強くそうした傾向があらわれており、非行性の問題となんらかのつながりを持つていようと考えられる。